Osaka Gakuin University Repository

Title	Identify の意味についての関連問題－ Identify という語の意味（4）－ Some Related Problems on the Meaning of the Word *Identify*: The Meaning of the Word *Identify*, Part 4
Author(s)	近松　明彦 (CHIKAMATSU AKIHIKO)
Citation	大阪学院大学　国際学論集（INTERNATIONAL STUDIES), 第 21 巻第 2 号：15-62
Issue Date	2010.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

Identify の意味についての関連問題
― Identify という語の意味（4）―

近　松　明　彦

Some Related Problems on the Meaning of the Word *Identify*: The Meaning of the Word *Identify*, Part 4

CHIKAMATSU AKIHIKO

ABSTRACT

This article aims to clarify the semantic property of the English lexical item, *identify*, focusing especially on some problems related to semantic characteristics of the word, *identify*.

In the first half of this article, we analyzed some synonymous words related to *identify*: i.e., we examined the meaning of the nouns, *influence* and *keeping*, and the verb, *merge*. As a result, it turned out that the meaning of each of the lexical items has something to do with a semantic element of "power" to some degree. However, the strength of its connection with "power" varies from item to item, and it was proved that the connection between *identify* and the "power" was not very strong. Furthermore, we argued that, to a certain extent, the words were characterized by some semantic features, such as [+/- unity] and [+/- X-permeation] (X=thought and property), etc. Regarding the idea of cognition, the word, *identify*, is the item that is related to the idea, whereas other words synonymous with *identify* have little to do with the idea.

Next, in the second half of this paper, we discussed the concept of "the mutual understanding with others", in the context of the semantics of *identify*. Among the examples examined, we found some

sentences in which *identify* is used so that it may express a mental process for one person to empathize with another. Through the analysis of those kinds of examples, we attempted to describe the way one's sympathy to others plays some important part in linguistic communication.

At the end of this paper, we presented a survey on the series of study on *identify* that I have been working on.

1. 序

本稿は、英語の語彙項目 identify の語彙的意味の分析を目的とする。そして、その意味分析は、英語定冠詞 the の意味を特徴づけるとされる文法用語 identifiability「同定可能性」（後述）の意味を明確化することを動機として研究することになったのであり、冠詞論に関係した視点を伴っている。このような identify の意味の研究は、拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）などで既に行っているが、本稿は、主としてそれらの研究で論じる機会の無かった関連問題について議論する。

それでは、identifiability「同定可能性」とはどのようなものなのであろうか。例えば、Huddleston and Pullum（2002）は、"Use of the definite article here indicates that I expect you to be able to identify the referent...."（同書 , p.368）「ここでの定冠詞の使用は、あなたがその指示物を同定することができると、私が期待していることを示している‥‥」（拙訳）としている。Huddleston and Pullum（2002）によると、identifiability は、which を用いた質問を先取りするという点から最も適切に理解されるとしている。例えば、同書は、"Where did you park the car?"（*Ibid.*）「その車をどこに駐車したのですか。」という質問に対して、"Which car?"（*Ibid.*）「どの車ですか。」という質問をする必要がない（何に言及しているのかを聞き手が知っている）という例を挙げて、このことを論じている（*Ibid.* at 368）。

このような identifiability「同定可能性」という用語の意味は更に分析する余地があり、また実際、その意味について一層の分析を加えることが望ましいのではないかと、本稿では考えている。筆者は、上に引用した議論において identify「同定する」という語の意味が（分析によってではなく）直観によって捉えられているという感想を持っている。そこで、identify「同定する」という語の意味を更に分析することができれば、定冠詞の使用条件をより詳細に示すことが出来、定冠詞が使用されるに至る幾つかのステップを、より基礎的で、より判明な考えを用いて示すことが可能になるのではないかと本稿では考えている。

以上のような事情を背景として、筆者がこれまでに従事してきた identify の意味分析をめぐる関連問題が本稿の主なテーマである。そして、

その関連問題群は、２つに大別することが出来る。１つめは、identify の関連語彙の分析の中で、筆者によるこれまでの研究で取り上げることのなかった、keeping「調和」、influence「感化」「影響」、merge「溶け込ませる」についての考察である。それらの語と identify の語彙的意味に含まれる幾つかの要素の異同について考察する。次に、２つめの関連問題は、identify の意味に関連する話題の中でも、特に「他者」の理解に関係するものである。言語による伝達を通して自己と他者の隔たりを乗り越えていこうとするヒトの言語の特質が、identify の用例にも見ることができる。そのような identify の使用にあらわれたヒトの他者理解の特性について考察する。その上で最後に、筆者による identify の意味論的研究を一度締めくくる意味で、これまでに筆者が行ってきた identify の意味についての研究を概観する。

2. さらなる関連語彙

2.1. テクストからの関連語の抽出

拙論（2009b）における類義語に関する考察、及び、拙論（2010）における反意語に関する考察で扱った例のほかに、幾つかの注目すべき用例がある。以下に引用する用例は、E. A. Poe の短編小説 “The Fall of the House of Usher”（「アッシャー家の崩壊」）の冒頭に近い一節であり、封建的時代における或る邸宅の名称とその邸宅の住人であった一族の名称の関係について述べられた一節である。この例に見られる語彙の幾つかのものは、反意語であるよりは、どちらかといえば類義語的であるように思われる。しかし、より正確に表現しようとするならば、それらの語は、むしろ identify が用いられる状況に至る心的過程の途上で生じる状態を記述するために用いられる、identify の或る種の関連語であるという印象を受ける。その一節を、以下に見てみることにする（それらの関連語には、二重下線を施しておく）[1)]。

1）以下の引用における下線（二重下線や波線を含む）は、原文によるものではなく、引用者による（尚、そのあとの他の引用例についても同様である）。

（1）It was this deficiency, I considered, while running over in thought the perfect keeping of the character of the premises with the accredited character of the people, and while speculating upon the possible influence which the one, in the long lapse of centuries, might have exercised upon the other — it was this deficiency, perhaps, of collateral issue, and the consequent undeviating transmission, from sire to son, of the patrimony with the name, which had, at length, so identified the two as to merge the original title of the estate in the quaint and equivocal appellation of the "House of Usher" — an appellation which seemed to include, in the minds of the peasantry who used it, both the family and the family mansion.

（Poe, 1975: 232）

この邸の性格と、世間に認められているこの邸の住人の性格とが、実に鮮やかに調和していることを思い、また何世紀もの長い歳月の間には、邸が住人に感化を及ぼすこともあり得るかと思いめぐらすうち、わたしはふと考えたのだ—この傍系親族のないということ、したがって家名とともに家督が父から子へと真直ぐに伝わってきたということ、このことが遂に邸と住人を同一視させてしまい、この地所の本来の呼び名を「アッシャー家」という奇妙であいまいな名称へ—その名を口にする小作人たちの胸の中では、この一家と邸とを合わせ意味する名称へと—溶けこませてしまったのではあるまいか、と。

（ポオ, 阿部 他（訳）, 1999: 337-8）

上の一節における二重下線を施した語彙、即ち、keeping「調和」、influence「感化」「影響」、merge「溶け込ませる」が、下線部の identify と何らかの意味的関連を示していると考えることが出来るように思われる。

2.2. Keeping 及び influence

上に引用した一節で、identified が用いられるのに先立つ文脈、即ち、引用箇所の前半に、２つの while 節が見出される（波線部を参照。但し、

〔原文における while の繰り返しが〕和訳では「‥‥うち」という１つの訳語にまとめられている)。

それら２つの while 節のうち、まず１つ目の while 節の中に、keeping「調和」「一致」という語が見られることに注目したい。この keeping は、どのような位置、環境に現れているのだろうか。上に引用した一節から、特に関係する部分にのみ限定して、以下に再録する事にする。

(2) …, while running over in thought the perfect keeping of the character of the premises with the accredited character of the people, ….

(Poe, 1975: 232)

この邸の性格と、世間に認められているこの邸の住人の性格とが、実に鮮やかに調和していることを思い、‥‥

(ポオ, 阿部 他 (訳), 1999: 337)

この keeping は、上の例文の中の the perfect keeping of the character of the premises with the accredited character of the people という名詞句の中に生じている。この表現は、敢えて直訳を試みるならば、「‥‥人々の認められた性格との、家屋敷の性格の完全な調和 (keeping) を‥‥」(拙訳) となるであろう。このように keeping が「調和」や「一致」(ここでは、住宅と住人の間に成り立つ「調和」や「一致」) を意味していることということは、既に拙論 (主に拙論(2010)) で指摘したように identify が＜一致＞、あるいは、＜統一＞といった意味素性を備えていたことを連想させるであろう[2)]。

次に、２つめの while 節の中には influence「影響」という語が見られる。この influence という語はどのような位置、どのような環境に生起しているのだろうか。ここでも、上の最初の引用から、特に関係する部分のみに限定して以下に再録することにしよう。

2) この点について指摘していた文献は、本文で触れたように主に拙論 (2010) であったが、明確な素性の形を取らずに、単なる日常的語法を用いるということでよければ、拙論 (2009a) でも、「統一」ということに触れていたということを付け加えておく。尚、ここで言う、「統一」や「一致」のような意味内容は、＜統合＞という表現でも言い換えることが出来るかもしれない。

（3）…, and while speculating upon the possible influence which the one, in the long lapse of centuries, might have exercised upon the other ….

（Poe, 1975: 232）

‥‥、また何世紀もの長い歳月の間には、邸が住人に感化を及ぼすこともあり得るかと思いめぐらすうち、‥‥

（ポオ, 阿部 他（訳）, 1999: 337）

この influence という語は、the possible influence which the one, in the long lapse of centuries, might have exercised upon the other という、関係詞節を埋め込まれた名詞句の主要部の位置に生じている。この名詞句は、敢えて直訳を試みるならば、「何世紀もの長期間に、一方から他方へ及ぼしたかもしれない、可能な影響」（拙訳）のようになるであろう。このように、同一視されることになる２つの要素間に長期にわたる相互の影響の存在が想定されている。ここで、the one が the premises「家屋敷」を指し、the other が the people「人々」を指すことは、先行文脈から明らかであろう。先に見た、１つ目の while 節の内容をより詳しく言い換えたのが、この２つ目の while 節であり、前者における keeping「調和」が後者における influence「影響」に対応するという関係があることが推察されるであろう。

keeping や influence といった語が identify と関連しているということは、一定の推察の範囲に留まっている限り、問題なく成り立つものと思われるが、但し、これらの語が見られるのは while 節である。時の接続詞である while については、（原因、根拠の接続詞などの場合とは異なり）それが導く節の内容と、その節が関係する、他の節（つまり、主節）の内容との間で、何らかの論理性の強い関係が保たれているということを明示していると考えることは確かに出来ないであろう。両者の間に因果関係や何らかの強い必然的関係があると考えることは難しいであろう。それらの間には、ただ潜在的なつながりが暗示されているに過ぎないと思われる（identified は主節に直接属する要素ではないが、主節から続く〔非制限的〕関係詞節内の要素である）。とは言え、この引用例の文脈や、表現されている内容を考慮すれば、ここで問題としている keeping や influence などの語が、

identify という語と意味内容について一定の並行関係を持つことがわかるであろう。即ち、identify で表わされるような、同一視の過程が生じる前の何らかの段階で、２つの要素の間に、上で言及したような調和や一致(keeping)、また、影響（influence）などの過程が成立するということがあり、結果としてそれらの要素間に同一視が生じることにつながったのではないか。概ね、そのような仕方で、keeping や influence と identify の表す意味の関係を理解することができるのではないだろうか。このように influence「影響」が keeping「調和」をもたらし、そのような思考が、identified「同一視した」ということの背景、もしくは、その根拠となったものと考えられるであろう。このように identify は、keeping、influence、identify と一定の意味的な関連性、共通性を持つと考えることができる。

2.3. Merge について

それから、上の例の後半部分で、identified の生じている位置の数語ほど後の箇所を見てみよう。そこには、merge「(を）溶け込ませる」という語が観察される。上で最初に引用した一節から、ここで特に関係する箇所に限定して、以下に再録してみる。

(4) …, which had, at length, so identified the two as to merge the original title of the estate in the quaint and equivocal appellation of the "House of Usher" — an appellation which seemed to include, in the minds of the peasantry who used it, both the family and the family mansion.

(Poe, 1975: 232)

‥‥、このことが遂に邸と住人を同一視させてしまい、この地所の本来の呼び名を「アッシャー家」という奇妙であいまいな名称へ—その名を口にする小作人たちの胸の中では、この一家と邸とを合わせ意味する名称へと—溶けこませてしまったのではあるまいか、と。

(ポオ, 阿部 他（訳), 1999: 338)

ここで、merge は不定詞の形で文中に現れているが、これは、so…as to

inf. という形式を取り、程度・結果の用法に該当していると考えられる（引用した和訳では、或る種の意訳がなされてはいるものの、結果用法であるような訳し方になっていると言えよう）。

ここで、identified と merge は完全に同義語的であるとは言い切れない点があるかも知れない。というのも merge は、identified に対して程度・結果の関係に立つ形式の中に生じるからである。しかし、一方が他方に対して程度・結果の関係に立つのであれば、両者は無関係ではなく、それらの間には何らかの相似的、並行的な関係があると考えられるであろう。即ち、後者の程度・結果の表現によって、前者の程度、その波及効果の度合いがよりはっきりとしたかたちで示されると考えることができよう。この場合について、より具体的に言えば、identified the two によって、２つの要素が同一視され、その同一視がどの程度まで進んだのかということについては、それに続く as to…以下の表現（以下に再録される表現）によって、その程度が指定されているというふうに理解することが出来るであろう（以下に、先の引用から部分的な再録を示す）。

（5）… as to merge the original title of the estate in the quaint and equivocal appellation of the ‘House of Usher’ —…（略）…

（Poe, 1975: 232）

この地所の本来の呼び名を『アッシャー家』という奇妙であいまいな名称へ—（略）—溶けこませてしまったのではあるまいか、と。

（ポオ, 阿部 他（訳）, 1999: 338）

このように、identified は、merge と相似的、並行的関係にあると考えることができるであろう。そして、merge の方がより具体的な仕方で、ある種の結果、あるいは、到達点のようなものを示していると見なすことができるのではないかと思う。merge「（を）溶け込ませる」は、identify に見られる＜統一＞、あるいは、＜結合＞などの意味素性と近い素性を持っている可能性があると考えられる。そのような素性は、identified と merge に共有されたかたちで、両者の並行関係の基礎的部分に含まれているのではないかと思われる。

2.4. 関連語彙の概要

以上の考察に基づいて、最初の引用テクストから次のような語彙の連続的に推移する系列を導くことが出来るように思われる。

(6) [influence → keeping](名詞) ➡ [identify → merge](動詞)

この系列では、それぞれの要素の間に意味的な共通点があり、それに基づきながら、それぞれの要素間の意味的差異の為に、概念が連続的、推移的に展開している有り様が見られる。それらの意味的共通点とは、拙論(2009a) で提案した<仲介性>に近いものではないかと、現段階では思われる。<仲介性>とは、「identify は、2つの要素をつなぎ合わせる作用に対して用いられる傾向がある」という、identify の持つ意味的特質である(拙論 , 2009a)。このような推測に関連して、次節では関連語彙の語義について更に吟味することにしたい。(尚、上の identify を含む連続的な語彙系列は、必ずしも一般的なものでなく、上に引用し、分析した実際のテクストに見られるものである。)

2.5. 関連語彙に関する辞書的記述の吟味

それでは、以上の議論で扱われた identify の関連語彙について、このすぐ上の議論で示した推測を補足、検証するために、既成の辞書における記述を以下に引用し、それを検討することで、関連語彙の意味的特質を明確化し、それとの関連の中で、identify の意味的特質が明らかになるようにしたいと思う。

2.5.1. Influence

まず、influence の意味について、辞書 *Concise Oxford Dictionary* (*COD*) における記述を引用する[3)]。

3) PHRASES (成句)、DERIVATIVES (派生語)、ORIGIN (語源〔起源〕) は、省略する。また、改行等、レイアウト的な事柄に関して、若干原典と異なった形式になっている点がある。

(7) **influence** ■ **n. 1** the capacity to have an effect on the character or behaviour of someone or something, or the effect itself. ➤ a person or thing with such a capacity. **2** the power arising out of status, contacts, or wealth. **3 Physics, archaic** electrical or magnetic induction. ■ **v.** have an influence on.

(*COD*, p.729)

influence ■ **名詞** 1 誰か或る人、または、何かある物事の性質、あるいは、行動に対して或る効果をもたらす能力、もしくは、その効果それ自体。➤ そのような能力を備えている或る人物、もしくは、事物。**2** 地位、付き合い、あるいは、富から生じる力。**3 物理学、古語**　電気の、あるいは、磁気の感応。

■ **動詞**　に影響（influence）を与える。

（拙訳）

次に、上の記述から influence に関して、どのような印象を受けるか述べることにする。先ず、広い意味で何らかの「力」のようなものを持っていることに言及しているように感じられる。また、何か或るものごとが他に対して優位であるという感じを与える状況を説明する場合に用いられるように思われる。

このような印象は何に由来するのであろうか。まず、上の *COD* における語義説明の中に、capacity「能力」、effect「効果」、power「力」「権力」など、「力」を思わせるような語が見られる。そしてまた、*COD* の記述には、status「地位」、contacts「付き合い」、wealth「富」など、「力」や「優位性」につながり易いと思われる語も見られる。そのほか、*COD* の記述には、induction「誘導」、「感応」のような或る方向性を持った力を思わせる語も見られる。或る種の「牽引力」、もしくは、「指導力」のようなものを思わせる点があるが、広い意味では、やはり「力」の一種と言えるであろう。

次に、他の辞書である、*Longman Dictionary of Contemporary English* (*LDCE*) に挙げられている influence の例文から幾つかの例を引用し、influence の意味について検討する。まず、次の例を考えることにする。

(8) The Council had influence over many government decisions.

(*LDCE*)

評議会は多くの政府の決定に対して影響力を持っていた。

(拙訳)

上で見たように、*COD* における influence の語義説明から受ける印象として、「力」ということを思い起こさせる要素が強かったが、上に引用した *LDCE* の例でも、「力」ということが感じられる。政府の決定を左右する働きについて述べられており、それは様々な意味で一種の「力」として理解することができよう。一方、次に引用する例でも、やはり「力」という要素が感じられるが、今度は単にそれだけでないように思われる。

(9) There is no doubt that Bohr's influence was immense.

(*LDCE*)

ボーアの影響はきっと計り知れなかっただろう。

(拙訳)

この例は、辞書からの引用であるため、文脈を欠いているのだが、ここでの Bohr「ボーア」がどのような人物を指示しているかによって解釈が左右されるのではないかと思われる。もし Bohr が誰か暴君のような人物を指すのであれば、主として単なる「権力」が注目されることになるであろう。しかし、Bohr がデンマークの原子物理学者、ニールス・ボーアを指しているのであれば、(やはり「力」という要素は否定されないものの) ボーアの学説の受容ということが関係してくるであろう。後者の場合には、一種の共感に基づくかたちで、影響を受ける人たちの間にボーアの学説に対する (自主的な) 受容や同調が起こりえるかもしれないし、より一般的で抽象的な表現を使えば、「思考の浸透」(ここでいえば、ボーア的な学説上の考え方の浸透) といったことが観察されるのではないだろうか。

次の例についても、同じようなことが言えるが、単にそれだけに留まらない点がある。

（10）They had come under the influence of a strange religious sect.

（*LDCE*）

彼らは見知らぬ宗教上の宗派の影響下に入ってしまった。

（拙訳）

この例についても、恐らく「思考の浸透」ということは当てはまるであろう。あるいは、もう少し広く、「性質の浸透」と言うことも出来るかもしれない。ただし、単にそれだけではなく、場合によっては、一種の管理、指導のようなものの存在が感じられるようにも思われる。

ついでながら、「思考の浸透」が進行すると、関係する人々の考え方などの間で、一種の共通性が高まり、結果的に（関係者の間の）何らかの統一性が強められることになる場合があり得るのではないかと思われる。このことは、この後で論じることになる keeping の持つ統一感と共通する点が、この influence にも、部分的に当てはまることを示していると言うことが出来よう。

一方、次の例は否定文ではないが、疑似的な形で或る種の否定的文脈が形作られており、例外的に「力」の存在が認められないように思われる。

（11）For centuries the country remained untouched by outside influences.

（*LDCE*）

何世紀もの間、その国は外部の影響によって依然として影響を受けないままであった。

（拙訳）

この例では、「力」の存在が見られないのだが、それだけでなく、「思考の浸透」も同様に認められないことと思われる。また仮に「思考の浸透」を「思考、もしくは、性質の浸透」に変えてみるなどして、浸透するものの範囲を拡大してみても、「力」の関与はやはり見られない。尚、この例によって描かれる世界に、なぜ影響力のような「力」が見られないのかということに関して、外部からの影響を排除するような何らかの「管理」や

「指導」のようなものの存在を推測することは不可能とは言い切れないが、「力」や「管理」、「指導」といったものは、少なくとも明確で本質的な形では見られないように思われる。

このようなことは、untouched「影響されない」の語が擬似的に否定的性格を備えていることに由来するためであると考えられ、influence の語彙的性格のためであるとは考えられないであろう。

以上のように、(疑似的な形であるにせよ) 否定的な文脈が関わっているような、例外的な場合を除いては、influence が用いられるのは、何らかの「力」が関わっている場合が基本的であるように思われる。「思考、もしくは、性質の浸透」ということや、「管理」、「指導」ということについては、必須的な要素とは限らず、文脈から影響される形で時によって出没するようなものなのではないかと思われる[4)]。

2.5.2. Keeping

それでは次に、keeping という語について辞書での記述を検討することにする。以下に、*COD* における記述を引用する[5)]。

(12) **keeping ■ n.** the action or fact of keeping something.

(*COD*, p.777)

keeping ■ 名詞 何か或る物事を keep (「保持する」) するという行為、あるいは、事実。

(拙訳)

上の記述では、本来定義されるべき keeping という語が、定義のための説明文の中にも見られる。言うまでもなく循環的な定義である。実際の辞書にはよく見られることではあるが、本稿のテーマに関する限り、これだけでは本格的な議論を行うに十分な情報は得られないであろう。

4) *LDCE* に見られる influence の例文は、上に引用したものだけではないが、スペースの制約から、また、簡潔性の観点から、それらは省略することにした。

5) PHRASES (成句) は省略する。

そこで、派生上より基本的な形式となる動詞 keep の意味を踏まえておくことが望ましいであろう。このことについては、この後の N.B. で *COD* における辞書的記述に基づいて動詞 keep の意味の分析を行うことにする。では、この直後の N.B. での議論に基づくならば、動詞 keep の意味は、どのような特質を持つことになるのだろうか。筆者の見解では、それは主に次の３つの特質にまとめられるのではないかと思われる。即ち、keep の意味は、(i)「(望ましくない動きも含めて) 何らかの動きの＜抑止＞、＜抑制＞」、(ii)「このような＜抑止＞、＜抑制＞を可能にする何らかの『力』の関与」、(iii)「＜存在＞、＜存続＞などの感覚」といった特質によって特徴づけられるであろうと思われる（詳細は、N.B. を参照)。このうち、(ii) で言及されている「力」の関与は、(i)、(iii) の基礎を成すと考えられる重要なものである。

次に、keeping に戻って、*COD* 以外の辞書を参照しつつ、今度は例文を中心に考察してみてみよう。具体的には、*Longman Dictionary of Contemporary English*（以下、*LDCE*とする)、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*（以下、*OALD* とする）に挙げられている例を見ることにする。それらの辞書では、keeping が主に成句を成す要素という視点から扱われているように思われる。

まず、in keeping with という成句の要素として keeping が用いられる。in keeping with は、「～と一致して」と訳すことができるが、「～を遵守して」と訳した方が適切になる場合もある。ここでの keeping は「調和」「一致」、あるいは、「遵守」という概念を表わしていると言えよう。

次の例では、keeping に「一致」の意味が認められる。

(13) The latest results are in keeping with our earlier findings.

(*OALD*)

最新の結果は、我々のもっと以前の発見と一致している。

（拙訳）

keeping が派生される際の基本となる動詞 keep には、前述の通り、「力」

という要素が関わっていると考えられる。keeping が「一致」を表わすとすれば、keeping の場合に、上記の「力」や「管理」によって何らかの「統一性」がもたらされることが容易に想像される。keeping が「一致」を表わすという観察を、そのような「統一性」の観点から理解することが可能であろう。このように、上の例では、「力」は、直接には表面には現れていないが、背景にあって統一感の原因として作用しているように思われる。

また次の例では、keeping に「遵守」の意味が認められる。

(14) In keeping with tradition, everyone wore black.

(*LDCE*)

伝統を守って、誰もが黒衣を着ていた。

(拙訳)

「遵守」の意味を表わすことがあり得るという点で、keeping の使用の際には、何らかの「力」が前提されているのではないかと思われる。何らかの規範の「遵守」は、その規範の「遵守」を求める或る「力」の関与が根底にあると考えるべきであろう。その上、「遵守」は、規則や規範からの逸脱を防ぐのであるから、「動きに対する抑止」や「管理」といった考え(前述の keep が意味上の性質として備えていると思われる概念)を連想させるであろう。

次に、成句 out of keeping (with) について考えることにする。この表現は、「(〜と)不調和な」と訳すことが出来、いま上で見たばかりのもう1つの成句 in keeping with (「〜と一致して」、「〜を遵守して」) と対立していると言うことが出来よう。但し、両者の間で keeping の意味・用法に差があるのではなく、これらの成句の間の対立は、前者の一部を成す out of が後者に見られる in と対立的であることに由来するものと思われる。

(15) The cheerful cover of the book is out of keeping with the sad story told inside it.

(*LDCE*)

その本の楽しい表紙は、その本の中で語られる悲しい物語と不調和だ。

（拙訳）

（16）The painting is out of keeping with the rest of the room.

（*OALD*）

その絵は、その部屋の残りの部分と不調和である。

（拙訳）

keeping には、上記のとおり、抑止的な「力」を感じさせる点があり、また、そこから或る種の統一感が生じるのだが、一方、out of keeping の場合は、out of の持つ排除の意味合いによってそのような統一感が解消されているように思われる。そのため、結果として、out of keeping（with）については、逆に「不調和」を表わすことになっている。

このように、keeping 自体には、ある種の抑止的な「力」を背景とする統一感を表現する働きがあるように思われる。まず、形態論上、より基本的な形式である keep の方に目を向けるならば、全体には、何らかの存在を存続させるべく何らかの力を作用させることを意味する傾向が強い。そういった印象を受ける。他方、もう一度 keeping に話を戻すならば、そのような力を及ぼすところから結果として生じてくる一種の統一感のようなものを表現するという性格が強い。以上のような印象をこの keeping からは受ける。

ここで、先に見た influence との関連について考えてみることにする。keeping 自体について、「力」は、間接的な仕方ではあるが、関係していると言えよう。そして、そのような統一感に関連して、上で触れられた「思考、もしくは、性質の浸透」という性質は、ある程度認められるであろう。以上のように、keeping には先の influence と共通点があると言う事が出来よう。

N.B.

上の議論では、*COD* における keeping の記述を見たが、keeping は言うまでもなく、keep の派生形である。そこで、*COD* における keep 自体に関する記述を参照しながら、keep の意味について考えることにする（尚、直前の keeping に関する議論の中で、それに関連して触れられた keep の意味的特質は、主として以下の議論に基づいている）。

COD における keep の記述から受ける印象としては、まず、第一に全体に何らかの動きを抑止するような、もしくは、抑制するような作用について述べているという感じを持つ。次に２つめの印象として、特に望ましくない動き（あくまでも、keep の表わす行為の主体から見て望ましくない動き）を抑制するような場合に用いられるという印象を与えるケースが部分的に存在する。３番目に、「存在」、「不在」で言えば、広い意味で、「存在」、また、「有無」でいえば、「有」の意味を感じさせる点がある。全体には、「存続」という考え方（つまり、「存在」と「継続」を兼ね備えた概念）を思い起こさせる点がある。

それでは、上の印象はどのような所から来ているのであろうか。もう少し詳しく述べよう。

COD における語義の説明の中では、retain「保持する」、reserve「使わずに残しておく」、store「蓄える」のように広い意味で「保管」に類する概念を表わす語が多く用いられている（“have or retain possession of. ➤ retain or reserve for use in the future. ➤ put or store in a regular place.”（*COD*, p.776）「～という所有物を持つ、あるいは、保持する。➤将来の使用のために、保持する、あるいは、取っておく。➤決まった場所に置く、あるいは、蓄える。」）。「保管」は、「不使用」を、「不使用」は「活動の不在」を暗示するが、この「活動の不在」は、先述の「活動の抑止」によって引き起こされるであろう。このほか、「保管」の意味は、「存在」、「不在」のうち、広い意味で「存在」を示唆しているであろう。

また、remain「依然として‥‥の（状態）のままである」や、continue「続く、留まる」などのような、変化を好まないことを表現する場合に用いられる語句、あるいは、変化について消極的な態度を表わす語句が見ら

れる（“(of a perishable commodity) remain in good condition.「（腐りやすい産物について）依然良い状態のままである。」、“continue or cause to continue in a specified condition, position, or activity: *keep away from the edge* | *she kept quiet about it.*”（*Ibid.*）「指定された状態、位置、あるいは、活動に留まる、もしくは、留まるようにさせる：*keep away from the edge『刃先に近づかないようにしなさい』* | *she kept quiet about it『彼女はそのことを秘密にしておいた』*」）。換言するなら、それらの語は、「維持」、「継続」の概念を表わしているとも言えよう。このような意味は、「存続」にも近く、幾らかは、「存在」の概念を含んでいると言えよう。そして、そのような変化に乏しい存続の状態は、やはり「動きの抑止」によってもたらされるであろう。

それから、sustenance「生計」、look after「～の世話をする」などのように、経済的なことも含めて、「保護」などを表わす語句が見られる（“provide for the sustenance of. ➤ own and look after（an animal）.”（*Ibid.*）「の生計（のため）に（～を）供給する。➤（動物）を所有し、世話する。」）。このような「保護」等は、それにより生活や活動の維持が可能になるという点で、「存続」、「存在」のニュアンスを或る程度伴うであろう。しかし、「保護」等は何かを抑止する力を直接表わすわけではない。その点で、「活動の抑止」の意味は、ここでは認めることが困難かもしれない。但し、そのような意味合いが皆無だと断言することもまた難しいであろう。「保護」等は（必ずしも、他の活動を止めてしまうわけではないが）他の活動を或る一定の方向に管理、指導する傾向があることを含意している。そのような事柄は多くの場合、ある種の束縛を伴っていると言えるかもしれない。換言すると、keep や、その語義説明に用いられる幾つかの語句は、活動が好ましからざる方向に働くことを抑制するように何らかの力が働く場合に用いられやすいと解釈出来よう（ここで「好ましからざる方向に」と言うのは、あくまでも keep によって表わされる行動の主体の目から見て好ましからざる方向に、ということである）。

次に、delay「を遅延させる」、detain「を引き留める」、late「遅れた」など、予定より遅くなることを示す語が見られる（“delay or detain; cause

to be late."(*Ibid.*)「を遅延させる、あるいは、を引き留める；遅くなるようにさせる。」)。このことも、「活動の抑制」という観点から見ることができるであろう。活動が抑制されると、その活動の能率は落ち、「遅延」が予想されるであろう（この場合、「存在」の意味は幾らか薄れるように思われる）。

そのほか、honour「を守る」、fulfil「実行する」、observe「遵守する」などのように、「規則の遵守」、「義務の履行」に類することを意味する語句が見られる（"honour or fulfil（a commitment or undertaking）. ➤ observe or pay due regard to（a law, custom, or religious occasion）."(*Ibid.*)「（約束、あるいは、引き受けたこと）を守る、もしくは、実行する。➤（法律、慣行、宗教行事）を守る、あるいは、（それ）にしかるべき注意を払う。」)。ここでも、「活動の抑制」が関係しているように見える。「規則の遵守」にしても、「義務の履行」にしても、一定の方向に沿って行動を管理、指導するということを必要としているであろう。それらの事柄は、望ましくない行動（keep によって示される行為の主体が「望ましくない」と考える行動）を抑制することによって達成されると考えることが可能であり、その意味で、このような場合にも、一種の「活動の抑制」という性質が関与していると見ることが出来るであろう。一方、このような場合、「存在」のニュアンスは余り強くはないであろう。しかし、規範の遵守は、そのような規範を建前とするようなシステム（社会的慣行の体系など）の存続を含意してはいると言えよう。そのような意味で、消極的にではあるが「存在」のニュアンスは認められるということになるだろう。

最後に、make entries「記入をする」、write down「書き留める」、record「記録」などのように、「記録（する）」といった事に近い意味の語句が用いられている（"regularly make entries in（a diary）. ➤ write down as（a record）: *keep a note of each item.*"(*Ibid.*)「（日誌）に定期的に記入する。➤（記録）として書き留める：*keep a note of each item.『各項目の記録をつける。』*」)。「記録」も情報が失われることを防ぐために行われる行為として解釈され得るので、「情報の消失」や「忘却」という望ましくない過程を抑止するという点で、広い意味での「活動の抑止、抑制」に近い意

味を持つと考えることが可能であろう。また、「情報消失」の抑止は、「情報存続」を意味し、ここに「存在」という要素が認められると言えよう。

このように、keep は、ある「力」が、何らかの動きや活動に対して「抑止」や「抑制」をもたらす働きを表現する為に用いられる傾向が強い。また、keep は「存在」、「存続」の意味を含んでいる場合が少なくない。概ねそのように考えることが出来るであろう。全体としては、いわば何らかの「力」によって、一定の活動に対して「抑制」が生じ、それによって何らかの事物を「存立」させるような過程に言及する場合、keep を用いる傾向があると考えられよう。

2.5.3. Merge

最後に、merge について、辞書の記述や用例を検討して、その意味について考えることにする。では、以下に *COD* における merge についての記述を引用する[6)]。

（17）**merge** ■ **v.** combine or be combined to form a single entity. ➤ blend or cause to blend gradually into something else. ➤（usu. **merge something in**）**Law** absorb（a title or estate）in another.

（*COD*, p. 894）

merge ■ **動詞** 単一の実在物を形成するように合体する、もしくは、結合される。➤何か他のものへと次第に溶け合うか、または、溶け合うようにさせる。➤（通常、**merge something in**）**法律**（権利、もしくは、財産を）他者に吸収する。

（拙訳）

ここで、merge の語の意味について、*COD* の記述は、どのような印象を与えるであろうか。一言でいえば、互いに異なる複数の物事を一体化さ

6）ORIGIN（語源〔起源〕）は、省略する。また、改行等、レイアウト的な事柄に関して、若干原典と異なった形式になっている点がある。

せるような出来事に言及する際に用いられるという印象を与えるであろう。実際、上に引用した*COD*における記述には、combine「結合｛する／させる｝」、blend「溶け合う」のような語が見られる。このように、異なる事物を渾然一体のものとして融合させる場合に、merge という語が用いられると言えるであろう。

次に、*LDCE* で挙げられている例を見ることにする。そこで挙げられている例のうちで、特に次のものを見ることにしよう。

(18) The bank announced that it was to merge with another of the high street banks.

(*LDCE*)

その銀行は、もう1箇所の大通りにある銀行と合併することになっていると公表した。

(拙訳)

このように、企業や自治体の合併などに典型的に見られるように、異なる組織、団体を合体して1つのものにするような場合に、merge が用いられる傾向があるように思われる[7)]。そして、(influence や keeping に関して)

7) その他の類例が*LDCE*に見られるので、それらも以下に引用しておく。

(i) a. The company plans to merge its subsidiaries in the US.

(*LDCE*)

その会社は、合衆国にあるその子会社を合併するつもりである。

(拙訳)

b. proposals to merge the three existing health authorities into one

(*LDCE*)

3か所ある既存の保健当局を1つに合併する計画

(拙訳)

c. The villages have grown and merged together over the years.

(*LDCE*)

数年の間に、その村々は大きくなり、一緒に合併した。

(拙訳)

上の類例についても、本文で述べたことと同様の事が言えるのではないかと思う。

上での議論で触れられた「力」という要素については、このような場合、一定の「力」の要素が出来事の背景に関与しているということが、ある程度感じられるであろう。但し、そのような「力」は背景で作用する感じを与え、その関与の仕方はやや間接的であるように思われる。

また、（influence に関連して）先に言及した「思考、もしくは、性質の浸透」ということについては、この merge の例に直接関係するわけではないが、銀行合併の結果として、何らかの性質が相互に浸透し合って、結局のところ、その性質が共有されることになる可能性はあると言えよう。

また、以下に示すように、（人物も含めて）異なる事物と事物が互いに融合して、差異が外部から認識できないようになる場合にも、merge が用いられることが、*LDCE* に挙げられている例からわかる[8)]。

（19）Memories seemed to merge with reality.

（*LDCE*）

思い出が現実と溶け合うように思われた。

（拙訳）

この例では、「力」の関与は余り明確には認められないように感じられるであろう。次に、「思考、もしくは、性質の浸透」という特徴は、この場合にも当てはまると言ってよいであろう。先の銀行合併を描いた例よりも、この現実と非現実が融合する例の方が、「思考、もしくは、性質の浸透」がはっきり表れているように思われる。つまり、「力」の関与と「思考、もしくは、性質の浸透」は相互に補い合うようにして交替している可能性が考えられるかもしれない。

8）その他の類例が *LDCE* に見られるので、それらも以下に引用しておく。

（i）She avoided reporters at the airport by merging into the crowds.

（*LDCE*）

彼女は、人ごみの中に溶け込むことによって、その空港で記者たちを避けた。

（拙訳）

上の類例についても、本文で述べたのとほぼ同じことが言えるように思う。

以上のようにmergeは、一言でいえば互いに異なる複数の物事が渾然一体となる様子を表わす語であると考えて、おおむねのところ差しつかえないであろう。

2.6. 関連語彙に関する考察とまとめ

上で見てきたidentifyの関連語、influence、keeping、mergeについて、もう一度まとめておくことにしよう。

まず、influenceとkeepingについては、両者共に何らかの「力」と関わる意味を表わしていると言えるであろう。

influenceは、語感として力や優位性を感じさせる点があるが、そのことから、結果として異なる要素間での「思考、もしくは、性質の浸透」を意味するような雰囲気が派生的に現れてくるのではないかと思われる。但し、「力」と「思考、もしくは、性質の浸透」は、同時に共存する形ではなく、ある程度、相互に排除し合い、あるいは、相互に補い合う形で、交替するかのように見える。とは言え、全体に、influenceは「力」によって特徴づけられるような性格が強いように思われる。

一方、keepingが語源的に関連している語であるkeepも、ある意味で抑制的に作用する「力」を意味する面がある。しかし単にそれだけではない。keepの派生形であるkeepingは様々な物事の間に成り立つ一種の統一感を表現するが、keepが「力」を意味するという事情が、keepingに見られる統一感の表現という性格にもつながっているのではないかと思われる。

それでは、mergeの場合にはどうだっただろうか。mergeにおいてはそのような「力」の存在は、その語義の本質に直接関係する形では関係してはいないように思われる。実際は企業や自治体の合併などの場合に、mergeが用いられることが多く、常識的に言って、そのような場合、合併を実行するに足る一定の力が関わる場合が多いであろうという見方があり得るかもしれない。確かにmergeという語の表わす意味は、「力」と無関係とは断言できないであろう。しかし、mergeは自然に融け合うような様を表わす場合にも用いられ、「力」がmergeという語の意味に本質的な形で積極的に関与しているということは難しいのではないだろうか。つまり、

「力」は間接的、髄意的な形で関わると考えられる。むしろ、merge には「融合」を意味する面もあり、その点で merge は本質的に「統一」や「融合」を意味する傾向が強いと言えるように思われる。そして、merge について、「力」の関与が明確ではない場合、もう一方の特質である「思考、もしくは、性質の浸透」がより明確に意識されるように思われる。

ここで、identify との関係について言えば、以上のように、influence、keeping、merge などの語句は、この identify と意味の上で相互に関係している。緩やかな形ではあるが、それらは互いに一種の類義語的関係にあるように思われる。とは言え、それらは互いに違いも含んでおり、相違点と共通点の両方を備えながら、全体として一定の相互的なつながりを保っているように見える。これらの語句のうち、influence と keeping は「力」という考えによって特徴づけられる面があるのであった。他方、identify の意味にはそのような「力」が関わるという性質は強くないように思われる。確かに本人確認などの際には、一定の権威を伴った状況の下で本人確認が行われると考えられるため、そのような場面に関して述べる際の identify の使用には、何らかの「力」の要素が関係してくる可能性があるだろう。しかしながら全体としては、identify の意味に関して「力」という要素が本質的な仕方でかかわっているとは考えにくいであろう。その点で、identify は influence や keep とは異なる。その上でなお、本稿の最初の方で引用したテクスト（Poe の“The Fall of the House of Usher”からの引用）で示されたように、identify は、influence や keeping と共通した点をやはり有していると考えるべきではないだろうか。

それでは、identify は、これらの関連語とどのようなつながりを保持しているのだろうか。

まず、influence と identify の関連について考えることにする。上述のように、influence は「思考、もしくは、性質の浸透」ということが起こる場合に用いられることがあり得る、という特質を一面において備えており、この特質は、identify に見られる＜仲介性＞、＜類似性＞といった意味上の特性と重なり合う点があるのではないかと思われる。というのも、思考や性質が何らかの物事から他の何らかの物事に浸透するためには、それら

の２つの物事の間に或る種の仲介的関係が予想されるであろうし、また、浸透の結果として、それら２つの物事の間に一種の類似性が生じることが予想されるからである。

実際に、identify の場合にも「思考、もしくは、性質の浸透」ということを連想させる意味的要素が辞書の記述に見られる。*COD* における identify の意味の説明の中には、“（**identify with**）regard oneself as sharing the same characteristics or thinking as（someone else）.”（*COD*, p.707）「（**identify with**）自分自身が、（誰か他の人）と同じ特徴、あるいは、考えを共有しているものと見なす。」（拙訳）という記述がある（本稿末尾の補注1.2. を参照）。この identify の意味についての説明には、「自己と他者との同一視」という要素に加えて、「自己と他者の間の特徴（characteristics）や思考（thinking）の共有」という要素が見られる。既に見たように、influence は「思考、もしくは、性質の浸透」という概念をその語義の中に含んでいるのだが、それに類似した意味的性質が、このように identify にも備わっていると見なすことが出来よう。

一方、keeping は一種の統一感の表現として用いられることがあるのだから、その点では、同様に＜統一＞という素性の認められる identify もこの keeping と近い性質を持つと考えて差し支えないであろう。例えば、拙論（2010）では、identify が［－分離］という二項対立的に示すことのできる素性を持っているとしていたが、［－分離］は、＜統一＞、あるいは、＜結合＞といった意味特性としても解釈可能であろう。このように、identify は keeping にも近い。

それではここで再び、merge を取り上げ、今度は identify との関係について、どのようであったか考えることにしよう。merge についても、「力」がしばしば関係してくるのであったが、必ずしも「力」が本質的な仕方で merge の語義に結びついているというわけではないのであった。このことは、identify が「力」に明確な仕方で関わることがないという identify の特質と並行的であるように見える。また、merge の表わす「融合」や「統一」の意味合いは、identify が＜統一＞、＜結合＞といった意味的特性を備えていたこととも合致していると考えられよう。このように merge と

identify の間には、類似性を認めることができる。

このように、influence、keeping、merge は、品詞こそ完全に一致しているとは言えないものの、意味の上で相互にかなり近い性質を持っていると考えることが出来るであろう。しかし、identify は、多くの場合認識に関わる意味合いで用いられており、拙論（2010）も、［＋認知］という素性を持つものとして、identify を分析している。一方このような点で、influence、keeping、merge は本質的に認識に直接関わるとは言えないように思われる。無論、場合によっては認識や精神的な事柄についてそれらの語が用いられる事はあり得るだろう。確かに、それらの語句が認識や精神について語る文脈に偶然に現れる可能性を否定することは出来ないかもしれない。しかし、そうであるからと言って、influence、keeping、merge が全て本質的に認識や認知に関係する意味を持つと判断することは難しいであろう。このように、認識ということとの関連をめぐって、identify は、influence、keeping、merge などの語句と異なる点を含んでいると言う事が出来るのではないかと思われる。

以上のことをまとめると、概ね以下のような表にまとめることができるであろう[9)]。

9）本文の表１は、先に、2.4. 節で示した“[influence → keeping]（名詞）➡ [*identify* → merge]（動詞）”という系列に従って、左から右へと配列されており、そのため、identify が表の左端にではなく、中ほどの位置（左から３番目、右から２番目の位置）に現れるように配置されている。

なお、一般的には、＋の記号で示される正の値は、本来、－の記号で表わされる負の値と対立すると考えられるであろう。それに対しここでは、ある素性が正の値を取らない場合には、その素性が当該の語彙項目の意味に関与しないと考えられる。つまり、ここでは、正の素性と対立するのは、素性の積極的な否定ではなく、素性の不在なのである。そのようなことから、このシステムでは、素性が＋という値を取る場合以外は、（－ではなく）０という値が与えられるようにしている。そして、（　）に囲まれている特徴は、その特徴が観察されはするものの、余り明確には認められないことを示している。

また、“＋～０”などのように、値が交替しているような表記法を用いている点について、上の表全体の素性が本質的なものなのか（つまり、音韻論で言われる「弁別的」というのと似た意味で、「本質的」なものなのか）というと、ある程度臨時的なものを含んでいるという事になる。このように、上の表は、ある程度「表層的」な性質を備えていると考えるべきであろう。

	influence	keeping	***identify***	merge
[+／－ 力]	+～0	(+)	*(+～0)*	(+～0)
[+／－ 統一]	(+～0)	+	*+*	+
[+／－ X 浸透]	(+)	(+)	*+～0*	+～0
[+／－ 認知]	0	0	*+*	0

(X 浸透：X ＝思考、性質)

(表1)

以上の議論を通して、identify の語の特質が浮かび上がってきたのではないかと思われる。identify の意味については、「力」との関連が余り強くは見られないという意味で、上で検討した関連語句 influence、keeping の場合とは異なっている点がある。また、identify が、認知、認識に関わる性質を多く備えているということも、他と異なる点であろう。しかしながら、この identify という語が、＜仲介性＞、＜類似性＞などの意味特性、更に、＜統一＞、あるいは、＜結合＞などの意味特性を含んでいるということを考えると、この identify という語は、[+／－ 統一] や [+／－ X 浸透](X ＝思考、性質) などの性質によって特徴づけられる語、即ち、influence、keeping や、もう1つの関連語である merge とも類似していると考えることができるであろう。

N.B.

上の議論の中では、identify の語義を構成する要素で「力」にかかわる要素が観察されるとしても、それらは、臨時的、部分的なものに留まるのみであり、identify の意味にとって本質的なものでなく、また、強い形で現われてくるものでもないといった趣旨のことを書いている。しかし、この見解は観念的に論じられているに過ぎないので、そのような点を補うべく、以下に *LDCE* から実例を引用して、identify の語の意味に「力」が関与する程度が高くないということを確かめることにする。

先ず、次の例では、何らかの事件の捜査の様子が描かれているが、そのような場合には、一定の権力が確認という行為の背景にあり、「力」という要素の関与が認められるであろう。

（i）The police took fingerprints and identified the body.

(LDCE)

警察は指紋を採って、その遺体を確認した。

（拙訳）

しかし、次の例では、識別、確認の行為を示すために identify が用いられているが、その例から何らかの特別な「力」が関係しているという印象を受けることはない。

（ii）He was too far away to be able to identify faces.

(LDCE)

彼は余りにも離れ過ぎていて、顔を見分けることが出来なかった。

（拙訳）

確かに、上の例には、疑似的にではあるが否定的な要素が関わっているので、その影響を勘案する必要が出てくるであろう。しかし、次の例のように、否定的な要素を含んでいない場合であっても、identify の意味には「力」というものが関わっていないように見えるであろう。

（iii）Scientists have identified the gene that causes abnormal growth.

(LDCE)

科学者たちは、異常な成長（腫瘍）の原因となる遺伝子が何であるのかを明らかにした。

また、次のように、identify が一種の同一化や共感を意味する例でも、「力」という要素の関与は認められないであろう。

（iv）He identified with our distress.

(LDCE)

彼は、われわれの苦悩に同情した。

（拙訳）

以上のように、「力」という要素は、identify に関しては、観察される場合もあり得るが、常に見られるものではなく、identify に対して間接的な関係しか持たないように思われる。identify について、「力」という要素は本質的ではなく、「力」が関与する場合があるとしても、それは臨時的なものにすぎない。そのように考えて差しつかえないものと思われる。

なお、「思考、もしくは、性質の浸透」に関しては、上の最後の例（苦悩に同情することを描いた例）には、かなり明確に認められるが、上のそれ以外の例（警察の捜査の例など）では、あまり明確にはあらわれていないように思われる。

3. 他者との相互理解

3.1. 自己を他者に同調させる場合

次に、identify の用法を観察していると、いわゆる他者をめぐる問題に関係する事例が見られることに気づくことがある。我々は、多かれ少なかれ自己の内面を省みることができるであろう。しかし、他者の内面を直接に知ることはできない。他者がその他者自身の内面を省み、その内容を我々に向けて言語で語る場合に、我々はそれを信じることができる。また、様々な客観的な材料や証拠をもとに他者の内面について推論することが我々には出来るであろう。そのようなとき、我々は、他者に対する共感能力を用いて、他者を理解しようと努めるかもしれない。このような他者の理解は、言語の表現にも一定の影響を持ち得るであろう。例えば、日本語で知られている人称制限と呼ばれる現象などは、そのような他者理解と関連する点があるのではないかと思われる。

このように人称選択等、日本語研究においては他者と関係する事柄が存在することが知られている。仁田（1991）においては、日本語で人称とモダリティが相関していることについての指摘が見られる。また、このよう

なことについては、渡辺（1991）における、「わがこと」「ひとごと」などの概念も関係していることと思われる[10]。更に、このことは、神尾（1990）の議論（所謂、「情報のなわ張り理論」）にも関連する点があるように思われる。

上で言及した他者理解に関する問題には、筆者がここで identify における「自己を他者に同調させる用法」と称するものが関係しているように思われる。というのも、そのような用法においては共感という要素が多く作用すると考えられるなど、他者理解に関連する点が認められ、そのような意味で他者理解における１つの目立った過程であると思われるからである。この「自己を他者に同調させる用法」とはどのようなものなのであろうか。これは、完全な同一物（あるいは、同一人物）についてそれ自体（あるいは、その人自身）の同一性を確認するという場合（即ち、確認行為の場合）に用いられるのではなく、複数の異なる実在物についてそれらがあたかも同一物であるかのような仕方で「見なし」を行うという場合に identify が用いられるというケースである。このようなケースは、換言すれば、一種の擬制であると考えられる。現実の客観的状況（同一物、同一人物ではないという現実の状況）と、同一性の認定が可能という認識の間に乖離が見られるという意味で、そのような用法を虚構的用法と呼ぶことが出来よう。「自己を他者に同調させる用法」は、そのような虚構的用法の一種であるが、単にそれだけでなく、更にもう１つの特徴を備えている。虚構的用法においては、同一視主体（identifier）の他に、虚構的な同一視の対象となる２つの異なる実在物が、出来事・状況に関与してくるであろう[11]。ここで、同一視主体が自分自身に対して同一視を適用するために

10）渡辺（1991）は、「このような、話し手『私』のことを述べることは出来ても、他人『彼』のことを述べることの出来ない語の存在は、周知のことであろうが、それを本稿では『わがこと』性の語と呼ぼうとするのである。」（渡辺 , 1991）としている。そして、そのような「わがこと」に対し、「ひとごと」は「話手に関わりなく成立すること」という説明を与えている（*Ibid.*）。

11）同一視主体とは、本稿における臨時的造語であり、それは、複数の異なる実在物の間に虚構的な同一性を主体的に認めようとする（換言すれば、「見なし」を行おうとする）人物を意味する。

(つまり、同一視の再帰的適用の為に)、同一視の対象となる2つの異なる実在物のうちの一方が同一視主体と同一になるように状況設定する場合を想定することが出来よう。その場合、出来事・状況に関与する実在物の数は1つだけ減少することになるであろう。この点で、この用法は文法における再帰などの現象を思わせる点があるかも知れない。「自己を他者に同調させる用法」とは、おおむね、このようなケースを指しているのである。また、内容的には、自他の差を超えて相手に感情移入したり、同調したりするといった意味合いを持つ。

以上は、「自己を他者に同調させる用法」について、主として概念的議論を通してその特徴を述べようとする試みであったが、この用法について角度を変えて更に詳しく見ておくことにしよう。以下の議論では実際の用例に基づきつつ議論を深めたいと考える(尚、この用法の持つ概念に関して、既存の辞書である*COD*の記述に基づいて検討するという作業を行ったが、やや煩雑になる点があるため、その辞書に基づく分析は本節(3.1.節)末尾のN.B.にまわすことにした)。

筆者が観察した用例で、ここで問題としている使い方に該当する例を以下に引用する[12)]。

(20) Deprived of ordinary resources, the analyst throws himself into the spirit of his opponent, identifies himself therewith, and not unfrequently sees thus, at a glance, the sole methods (sometimes indeed absurdly simple ones) by which he may seduce into error or hurry into miscalculation.

(Poe, 1975: 142)

普通の手を打つ余地などまったくないのだから、分析的なプレイヤーは相手の心に没入して、彼と一体になる。このようにして、相手を落手に陥れたり誤算に導いたりする唯一絶対の手(ときとしては、それはまったく馬鹿ばかしいくらい単純な手なのだ)を

12) 拙論(2009a)「3. 用法のちがいについて」というテーマについて論じたときに既に見た例を再録することになる。拙論(2009a)の(8)に当たる。

一目で見抜く、などということもしょっちゅう生じるのである。
（ポオ, 田中 他（訳）, 2001: 10）

この例では、本来、ゲームの対戦者同士の間に一種の同一視が適用されていることになる。対戦者同士は明らかに別人であるだけでなく、ゲームをめぐって対立関係にすらある。そのような対戦者の間に同一的関係を認めるということは、現実の客観的状況からは乖離しており、その意味で、この事例は筆者の言う虚構的な用法の典型と言えよう。また、上の例における identify の見られる前後の箇所、"... the analyst throws himself into the spirit of his opponent, identifies himself therewith, ..."（Poe, 1975: 142）「分析的なプレイヤーは相手の心に没入して、彼と一体になる。」（ポオ , 田中 他（訳））を見ると、identifies（himself）「一体となる」の主語は、the analyst「分析的なプレイヤー」であることがわかる。この箇所では、himself「自分自身を」といった再帰代名詞を用いることで、虚構的同一視における 2 つの同一視の対象のうちの一方が、同一視の主体である the analyst と同一人物であることが示されている。この文は「自己を他者に同調させる用法」が当てはまる事例であると見ることが出来る。この用法は、既に上でも触れた通り、文法形式においては再帰などと関わっていると考えることが出来よう。

次に一層意味に接近した議論を試みることにしよう。上の例では、identifies himself therewith「彼（の精神）と一体になる」で、自己を他者（ここでは、ゲームの対戦相手）に同一化する過程を表現している。その同一化過程の直前の段階として、"the analyst throws himself into the spirit of his opponent"「分析的なプレイヤーは相手の心に没入して」という心的過程が述べられている。この文の主語 the analyst（この場合には「分析的なプレイヤー」と訳される）が主体（上で言う、同一視主体）として、相手の精神に自己を投げ入れるのであるから、このような場合の identify は、「融合」、「一体化」、「統一」といった言葉を思い起こさせるのである。したがって、このような identify にも、＜同質性＞、＜統一＞などの意味素性が存在していると想定することが可能であると思われる。

我々は、他者理解に際しては、一般にある種の共感能力を用いることになると考えられるが、上の「自己を他者に同調させる用法」の例についても、「共感」という要素が関係していると考えることが出来るであろう。

N.B.

「自己を他者に同調させる用法」が、どのようなものなのかという点について知るために、*COD* の記述の中でこのことに関連している用法についての記述を見ておくことにする。この用法の意味するものについて、上の議論の中で既に概念的な議論を行っており、以下の内容は、それと幾らか重なる点もあるかと思われるが、ここでは辞書の記述に沿って、より実証的に見ていくことにする。

まず、*COD* の記述の中で３の項目の前半に記載されている“(**identify someone/thing with**) associate someone or something closely with.”(*COD*)「(**identify someone/thing with**) 誰か、あるいは、何かを、～と密接に関係づける。」については、拙論における、これまでの議論の中で度々言及してきたのではないかと思う（*COD* の記述については、本稿末尾の補注に引用がある〔*OED* からの引用の次に *COD* からの引用を掲げてある〕)。例えば、identify が「同一視する」と訳されるような場合も、大きく言ってこの用法に相当するであろう。このことに関連して、*COD* の３の項目の後半には、“(**identify with**) regard oneself as sharing the same characteristics or thinking as (someone else) .”(*COD*)「(**identify with**) 自分自身が、(誰か他の人) と同じ特徴、あるいは、考えを共有しているものと見なす。」という記述が見られる。こちらの用法も同様に、「同一視する」と和訳されるべきものに近いであろう。しかし、ここで問題とされているのは、“regard oneself as…” の oneself「自己自身」という表現に表わされているように単なる同一視ではなく、より強く制限されたもの、やや特別な要素を含むもののように思われる。つまり、再帰的であるという点で、ある種、有標性が高いという印象を受ける。一般に同一視は自己と他者の間に成り立つ場合があるだけでなく、自己以外の２つ以上の異なる他者の間に成立する場合がむしろ少なくないと言えよう。実際に我々が見てきた用例の少

なからぬものは、同一視を行う主体以外の２つの異なる事物、あるいは、人物を同一視するというものであったと思う。つまり、合計３者が関与する。その意味では、*COD* の３の後半の記述 “(**identify with**) regard oneself as sharing the same characteristics or thinking as（someone else）.”（*COD*）「(**identify with**) 自分自身が、（誰か他の人）と同じ特徴、あるいは、考えを共有しているものと見なす。」は、自己と他者の間の同一視という一種の再帰性を伴っているという点で、単なる「同一視」の事例というよりも「自己を他者に同調させる」というやや特別な意味での「同一化」のあり方について述べていると考えるべきであろう。つまり、同一視を行う主体が自己自身を他者と同一視するため、（３者でなく）２者だけが関与することになるのである。同一視を行う主体が同一視の一方の対象でもあるため、同一視の過程に関与する関与者が１つ少なくなるのである。このような用法を、ここでは「自己を他者に同調させる用法」と呼んでいる。

3.2.「証明する」という意味合いが認められる場合

次に、「確かめる」という意味で用いられる identify が「証明する」というニュアンスを帯びる場合がある。例えば、次の例では identify という語が日本語訳において「(の) 身分を証明する」と訳出されているのが観察される。

(21) That, presented by his conductors to this Tribunal, he had announced himself by name and profession as having been for eighteen years a secret and unaccused prisoner in the Bastille; that, one of the body so sitting in judgment had risen and <u>identified</u> him, and that this man was Defarge.

(Dickens, 1987: 256)

‥‥また、彼が、案内人たちによって法廷につき出されて、自分の名と職業を告げ、バスチーユに、秘密の、告発されない囚人として十八年いたことを告げ、法廷に坐っていた一団のうちの一人が立ち上がって、彼<u>の身分を証明し</u>、そしてそれがドファルジュ

であったことなどを伝えた。

（ディケンズ, 本多（訳）, 1977: 326）

上の例では、identified が、「～の身分を証明し」と訳されている。ある人物について、その人物が誰なのかを知るために、本人の確認を行っていると思われるが、このテクストは法廷の場面を描写しているのであり、公式性や、公共性の度合いの高い行為が描かれていると言えるだろう。一般に、本人であることを確認する主体である人物が、その人の精神／脳の情報処理過程の範囲内だけで、或る人物の本人確認を行う場合にも identify という語を当てはめることは可能であろうが、そのような確認を第三者に向けて客観的に、そして正式に行う場合、日本語では「～の身分を証明する」という訳語を採用することがある。上の場合がそれに該当すると言えるであろう。

同じような例として、次の例を挙げることができる。

(22) "Oh, no; we had no conveniences for keeping him here. He is at a livery stable in the Rue Dubourg, just by. You can get him in the morning. Of course you are prepared to identify the property?"

（Poe, 1975: 164）

「いや、違います。ここで飼うわけにはゆきませんからね。すぐ近くの、デュブール街の貸厩（かしうまや）に置いてあります。明日の朝にはお渡しできる。もちろん、自分のものだという証明はできるでしょうね」

（ポオ, 田中 他（訳）, 2001: 49）

この Poe（田中他、訳）からの引用例でも、"Of course you are prepared to identify the property?" を「もちろん、自分のものだという証明はできるでしょうね」と訳しており、identify が「証明する」という意味を持つものとして解釈されていると言える。これは個人同士の対話の場面であるが、捜査に関係する場面であるため、やはり客観性が求められるのだと考えることができる。

既に見てきたとおり、identify は recognize など、認知に関わる語と関係しており、それは１つの心的過程（換言すれば、ヒトによる情報処理の過程）に言及する際に用いられる語の１つだと考える事が出来よう。しかし、単にそれだけではなく、対人的、社会的に何らかの一定の責任を負うかたちで確認行為がなされるような場合にも identify という語は用いられる。一方、それと同じような状況下で（「身分証明書」などと言ったりするのと同じように）日本語では「身分を証明する」などの語が用いられることがあると考えることができるであろう。

人の知覚や、その他の精神活動の内容というものは、その人、本人にはわかるものであるが、他者がそのようなことを直接知ることはできないであろう。他者の心は外部から反応を観察して、推測、想像を行うか、あるいは、その他者自身によって語られる、その人物の心的過程の内容についての記述、表白を信じるかするほかはないであろう。同様に、identify によって表わされる或る人物についての確認も、確認を行った人物が確認を宣言し、周囲の聞き手がその宣言を了解し、それを信じることで、はじめて一定の合意事項として成立することになるであろう。そのような場合の確認を宣言する際に、英語では identify と言い、日本語では、「（身分を）証明する」と言うのではないかと思われる。identify という語は、本来、心的過程の表現のために使用されるという性質が強いが、ここで見た事例では、そのような内的なものを外部に投げかけて、自己と他者の或る種の断絶のようなものを克服しようとする、対人的、社会的目的のためにこの語が用いられているという事が出来よう。

3.3. identity と他者

言語の主要な役割の１つが、伝達（communication）を行うということであるのは言うまでもないであろう。意思伝達は、自己と他者（the other）との間で相互理解を深めるための基礎を成していると言えるであろう。以上の議論で見てきた、「自己を他者に同調させる場合」と、「『証明する』という意味合いが認められる場合」は、そのような人間の相互理解の過程を例証する実例であると言えよう。

4. identify の意味についての研究のまとめ

以上の議論は、拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）という一連の研究の中で行ってきた identify の意味を解明しようとする試みの一部を成している。拙論をもって今回の identify の意味分析は一通り完結することになる。ここで、その一連の研究について簡単にまとめておくことにする。なお、以下にまとめるのは、その一連の研究で明らかになった幾つかの特質であり、それらの特質を包括するような identify の意味の全体像に関する仮説や理論といったことについて論じることが望ましいであろうと考えられるが、そのような議論は他の機会に譲ることにしたい。

4.1. 拙論（2009a）

まず、*Oxford English Dictionary*（*OED*）や *Concise Oxford Dictionary*（*COD*）などの辞典における *identify* についての記述を検討した上で、それらの辞典における記述が我々の研究目的に必ずしも適していると言えない点があることを示した。

次に、*identify* の例文を実際に分析した。その結果、用法間の区別に曖昧性が見られる事が示されることになった。語の意味については、用法ごとに分けて考える立場と、用法の相違に関わりなく意味を統一的に理解しようとする考え方があることが一般に知られている。拙論（2009a）における実例の分析を通して、このような２つの考え方のうち、後者の考え方の方がより適切であることが明らかになった（なお、このことは、用法ということを完全に否定するのではなく、意味を統一的に捉えようとする姿勢の方をより重視するということである。実際には、各論的な議論に際しては、用法の差異や用法の特質を踏まえて分析や議論を進める場合があった）。

これらのことを踏まえて、*identify* という語の意味的特質を把握しようと試みた。拙論（2009a）における議論から以下の（i）～（iii）の特質を挙げることが出来る：(i)「仲介性：identify は、２つの要素をつなぎ合わせる作用（いわば、一種の結合作用）に対して用いられる傾向がある。」

(ii)「類似性：identify という語が当てはめられる実際の結合過程は、つなぎ合される要素間の共通した性質に依存している場合が多い。」(iii)「範疇形成：identify という語が当てはめられる実際の結合過程は、仲介性によって互いに類似した複数の要素を１つの範疇にまとめる傾向がある。」以上のような特質を、identify に関して認めることが出来た[13)]。

4.2. 拙論（2009b）

拙論（2009b）では、英語の動詞 identify の類義語を中心に、identify の意味を考察し、英語の定冠詞 the の使用との関連について考えた。実際のテクストの調査を行った結果、identify の類義語には recognize「認める」、know「知っている」、ascertain「（を）確かめる」、superpose「重ねて置く」などが存在することが明らかになった。これらの中で、recognize は特に identify と関係が深いが、identify の方がそれより一層分析的な特質を持つということが、辞書（*COD* など）の記述からわかる。その上で、実例を調査することによってこの点を確認することができた。加えて、素性＜綿密性＞が identify の語彙的記述に追加されるべきだという指摘を行った。次に、ある意味で発見が反復されるような状況に対して、identify の語が用いられる傾向があることを示し、そこから［発見—確認］モデル、［発見—再発見］モデルと称するモデルを提案した。これらのモデルは、identify と recognize が当てはめられる状況を模式化したものである。何らかの対象について、人が何回も発見、再発見を反復しながら、その対象に関してその都度発見を行い、そうして獲得した知識を自己の知識体系の中に蓄積していく有り様を、それらのモデルは模式化するのである。そして、この仮説に基づきながら、＜再度性＞あるいは、＜非初回性＞と呼ぶ特性を、identify がその語義の内に含んでいると考えることになった。概ねそのような再発見過程を表現する為に、identify や recognize などの語が用い

13) 尚、(iii) の「範疇形成」については、拙論（2009a）を執筆後、筆者自身の見解に若干の変化があり、本稿の執筆の段階では、「範疇形成」は identify の主要な特質として主張するには、十分な根拠に基づいているとは言い難い点があるという考えに傾いている。「範疇形成」は、identify の本質的特質というよりも、その関連事項であると考える方がより適切であるという可能性がある。

られるのだと考えることができる。

その上で、identify の語が定冠詞 the の使用を特徴づけるという事とのかかわりを考えるために、「x をよりよく知るようにせよ。」という規則を仮定するモデルの提案を試みた。この規則は、同じ対象に対して何回も繰り返し適用されるとし、それによって先述の再発見過程がもたらされるのだと考えることができる。このような反復的再発見過程を一定の談話中に展開するならば、その談話中に或る同じ語句が繰り返し現れることになり、その語句に関してその都度新たに発見された情報が追加されて行くことになるであろう。このような同一物について発見を反復するという思考様式は、談話文法や機能文法における一般的な基本的テーゼと合致すると考えられる。即ち、英語における左から右へ向けての横書きの表記体系においては、旧情報が左に現れ、新情報が右に現れるという原則が、一般に広く受け容れられている。そのような見解は、反復的な再発見の過程に基づく仮説（拙論（2009b）の提案する仮説）が予測し得るものであり、これと合致していると考えられる。また、このような反復的再発見過程に基づくモデルは、定冠詞付きの名詞句が旧情報を担うとする見解（機能主義者の間で一般に共有されていると考えられている見解）とも深く関係する可能性があると考えられるであろう。以上の事が、拙論（2009b）では示された。

4.3. 拙論（2010）

拙論（2010）では、反意語との関連に重点を置きながら、この identify の語の意味を明らかにしようと試みた。実例の調査によって、identify の反意語として separately perceive「別々に知覚する」、distinguish「識別する」、oppose「対立させる」などの語句が集められた。そのような語に関して、辞書的記述の面では、*COD* の記述を吟味し、また、例文については、それ以外の辞書から例文を引用・分析して、それら反意語の意味特性を明らかにしようとした。

その結果としては、第一に、identify の意味が［－分離］という素性で特徴づけられることが明らかになった。また、identify は、素性［＋認知］

を持ち、separately perceive、distinguish なども、同じ［＋認知］素性を共有している。この点で、それらの語句が、意味の場（semantic field）を成していることが確認された。このように［＋認知］を共有する意味場の中で、identify が［－分離］素性を持つのに対し、separately perceive と distinguish は、［＋分離］素性を持つという点で、前者と後者は互いに反意語として対立していることがわかった。その上で、そのような意味の場の周辺にある領域に、素性［0 認知］を持つ oppose が位置している。oppose は、素性［＋／－分離］に関して、［－分離］を持っている identify と対立しているが、そのことに加えて、この oppose が素性［＋＋参加］をも備えていると考えられるために、結果として identify と対立していることが特に強く意識される場合がある。概ね以上のような意味的相互関係が identify とその反意語の間に認められるということが拙論（2010）では示された。

冠詞論との関連に関しては、identify が素性［－分離］を備えているため（つまり、ある種の仲介的な結合過程を示す傾向があるため）、identify する（同定する）ことのできる対象が、周囲の事物に関連、もしくは、依存する傾向が強くなりやすいと考えられ、また、その結果として新情報よりも旧情報につながりやすくなるであろうということが予想される。このことは、（機能主義者との間で一般に共有されている見方なのだが）定冠詞 the が旧情報を担いやすいという一般によく知られた特質と並行的であり、両者の間に一定の共通点があると言えるのではないかと思われる。いくつかの英語学、言語学の文献（例えば、Huddleston and Pullum（2002）など）においては、the が使用されている場合、相手がその指示物を同定（identify）することが可能だと期待していることを示していると考えられているが、拙論（2010）の考え方は、そのような先行研究に見られる英語定冠詞についての学説を用語分析の点から裏付けていると言えよう。

4.4. 本稿

では最後に、本稿で明らかになった点について、まとめておくことにする。但し、本稿での議論は、既に上で見た通りであり、重複する点がある

かもしれないので、簡単に要点のみをまとめておく事に留めることにする。本稿では先ず、influence、keeping、merge などの関連語について分析しながら、それと identify の関係について考えた。

それらの語は、identify と必ずしも同じ特質ばかりを持つとは限らず、共通点と同様に相違点をも備えている。influence と keep については、「力」という要素がその意味にかなりの程度、関係しているという性質が認められる。一方、merge については、「力」が関係する場合もあるが、この「力」という要素は必ずしも merge という語の意味の本質に関係しているわけではない。この点について、identify の場合もその意味には、「力」という要素が常に明確に関係してくるとは限らないという性質を持つ。一方、この identify は「認識」や「認知」に関係する語彙だが、influence、keeping、merge の語彙的意味の本質には、「認識」や「認知」ということは常に、そして、直接的に関係しているわけではないように思われる。

それにもかかわらず、influence、keeping、merge には、全体として identify に対する類義語的な性格がかなり認められる。influence に見られる「思考、もしくは、性質の浸透」といった特質は、identify の＜仲介性＞や＜類似性＞と近い関係を持つように思われる。また、keeping には一種の「統一感」を表現しているという性質があるが、identify にも、＜統一＞、＜結合＞といった素性を認めることができる。最後に、merge も、「融合」、「統一」といった意味的要素を含んでいるように思われるが、これは、identify が＜統一＞、＜結合＞といった意味的素性を持っていることと共通していると見ることが出来るであろう[14]。

14) 拙論（2009a）で、意味の統一的把握を目標とする考え方を示していた。この点について、拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）、及び、本稿において、明らかとなった幾つかの目立った特質の集合のような形で、identify の意味を示すことは、とりあえず或る程度まで可能であるということができよう。しかし、identify の統一的特徴を示すことは、現段階では時期尚早ではないかと感じさせる点もある。長期的に見れば、本稿は今もなお、何らかの程度、未完成の要素を含んではいるであろう。その上で、現段階で解明された範囲で、identify の意味に関して内容を示すことは、やはり一定の意義を持つであろうと考えている。

5. 結びにかえて

以上のように、拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）、及び、本稿において、identify とその関連語彙の意味の分析を試みてきた。上で概観したように、それらの議論の中で、幾つかの目立った特質が明らかにされた。それらは、幾つもの意味論上の素性や特性の集合の形でまとめられている。

本来であればそれらの特質をまとめて、それら全体を包括することの出来るような一般性の高い仮説や理論を定立することが望ましく、できれば、そのような目標を目指しながら、今後も研究、考察を継続したいと考えている。また、identify の意味分析に着手した動機は、（identify と関係する派生語である）identifiability（「同定可能性」）が英語の定冠詞 the の使用を特徴づけるという英文法についての学説（Huddleston and Pullum（2002）など）をより深く理解したいという事であった。できれば、拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）、及び、本稿において明らかにされてきた identify の持つ概念の体系や構造を、今後は英語の定冠詞 the に関する、より深い理解へ向けて応用することを試みたいと考えている。

補注

1. 辞書における identify の記述

1.1. *Oxford English Dictionary*（*OED*）における identify の記述

参考のため、以下に *Oxford English Dictionary*（*OED*）から identify についての記述を引用する。

1.a. *trans.* To make identical（*with*, † *to* something）in thought or in reality; to consider, regard, or treat as the same.

b. *(a)* To make one in interest, feeling, principle, action, etc. *with*; to associate inseparably. Chiefly *refl.* and *pass.* *(b)* **to identify oneself with:** *spec.*, to model oneself on, esp. unconsciously; to feel oneself to be associated with or part

of; freq. *absol.* with ellipsis of the refl. pron. Also occas. *intr.*, to perform or undergo such a process with regard to something unspecified.

† **c.** *intr.* To be made, become, or prove to be the same; to become one *with*. *Obs.*

2. a. To determine (something) to be the same with something conceived, known, asserted, etc.; to determine or establish the identity of; to ascertain or establish what a given thing or who a given person is; in *Nat. Hist.* to refer a specimen to its proper species.

b. To serve as a means of identification for.

3. To discover, perceive; to localize. *colloq.*

Hence **identifying** *ppl. a.*, that identifies.

1.a. *他動詞*。(何かと、に) 思考において、あるいは、現実において、同一のものとすること。同一のものとして、考え、見なし、あるいは、扱うこと。

b. *(a)* 関心、感情、主義、行動等、において、～と1つにすること。不可分に関係づけること。主として、再帰形、および、受動形で。*(b)* **to identify oneself with:** *具体的に*、～を手本にすること。特に、無意識に。自らが、～と関係づけられている、あるいは、～の一部であると感じること。しばしば、再帰代名詞の省略を伴って、*独立的に*。また、時に、*自動詞*。何か、不特定のあるものに関して、そのような過程を実行、あるいは、経験すること。

† **c.** *自動詞*。 同じであると、される、なる、あるいは、判明すること。～と1つになること。*廃語*。

2. a. 考えられる、知られる、断言される、等のことをされた何かあるものごとと、(何かあるものごとが) 同じだと決定すること。～の正体 (identity) を決定する、あるいは、確証すること。一定の事物が何であるのか、あるいは、一定の人物が誰であるのかを確かめる、あるいは、確証すること。博物学では、ある標本をその種に帰すること。

b. ～のための身元確認 (identification) の手段として役に立つこと。

3. 発見すること、知覚すること、特定の場所に範囲を限ること。*口語*。したがって、**identifying** 分詞形容詞。確認するところの～。

上に引用したのが *OED* における identify に関しての記述である（レイアウトは原文と若干異なる点がある。また、用例等は省略している）。

1.2. *Concise Oxford English Dictionary* (*COD*) における identify の記述

Concise Oxford English Dictionary (*COD*) における identify についての記述を以下に引用しておく。

identify

1 establish the identity of. **2** recognize or select by analysis. **3** (**identify someone/thing with**) associate someone or something closely with. ➤ (**identify with**) regard oneself as sharing the same characteristics or thinking as (someone else).

(*COD*, p.707)

identify

1 ～の正体（identity）を確証する。**2** 分析によって、認知する、あるいは、選び出す。**3**（**identify someone/thing with**）誰か、あるいは、何かを、～と密接に関係づける。➤（**identify with**）自分自身が、（誰か他の人）と同じ特徴、あるいは、考えを共有しているものと見なす。

（拙訳）

以上が、*COD* における identify についての記述である（尚、原典では、冒頭、見出し語の直後に品詞〔動詞〕と語形変化についての記述が見られるが、ここでは省略している。また、改行等、レイアウトは原文と若干異なる点がある）。

2. 拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）、及び、本稿における調査方法について

2.2. 予備調査における用例の検索と引用について

拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）、及び、本稿において、用例の収集に関しては、最初に簡単な予備調査を行い、その上で、本格的な調査を行った。予備調査の段階では、*Free eBooks by Project Gutenberg* の電子化されたテクストを用いて用例の検索などを行った。その上で、実際の引用に際しては、既に印刷され、冊子体の形で刊行された著書（単行本〔翻訳であれば一部は文庫本〕）を使用した。

2.1. 用例について

拙論（2009a）、拙論（2009b）、拙論（2010）、及び、本稿において、収集した用例のうち多くの用例を用いたことは確かであるが、必ずしも全ての例文を網羅していたわけではない。ひとつには、統計的、計量的な方法を用いたわけではないので、その意味で全てを網羅することが必ずしも不可欠であるとは考えられなかったからである。また、議論が過度に煩雑になることを避けたいと考えたということも影響しているかもしれない。特に、Santayana（1998）等からの引用については、用いられるテクストが哲学的なものであることから、テクストの解釈に際して哲学の専門的知識が必要と考えられ、その点で解釈に十分責任を持ちかねると考えられる場合もあった。そのため、一部の例については、敢えて引用しなかったものもある。しかし、そのような場合であっても、例文の選択が恣意的なものとならないように留意した。

参考文献

安藤貞雄（2008），『現代英文法講義』，東京，開拓社．

荒木一雄・安井稔（1992），『現代英文法辞典』，東京，三省堂．

福地肇（1985），『<新英文法選書10> 談話の構造』，東京，大修館．

Halliday, M.A.K.（1994），*An Introduction to Functional Grammar（2nd Edition）*，London, Edward Arnold.

ハリデー, M.A.K.（M.A.K. Halliday）, 山口登・筧壽雄（訳）（2001）,『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』, 東京, くろしお出版.

服部四郎（1968）,「意味」, 服部四郎、沢田允茂、田島節夫（eds.）,『岩波講座　哲学 XI　言語』, 東京, 岩波書店, pp. 283-338.

Huddleston and Pullum（2002）, *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge, Cambridge University Press.

池上嘉彦（ed.）（1985）,「英語学コース　第４巻　意味論・文体論」, 東京, 大修館.

神尾昭雄（1990）,『情報のなわ張り理論』, 東京, 大修館書店.

仁田義雄（1991）,『日本語のモダリティと人称』, 東京, ひつじ書房.

小河原誠（1997）,『ポパー—批判的合理主義』, 東京, 講談社.

白井賢一郎（1985）,『形式意味論入門—言語・論理・認知の世界—』, 東京, 産業図書.

鈴木孝夫（1973）,『ことばと文化』, 東京, 岩波書店.

戸田正直, 阿部純一, 桃内佳雄, 往住彰文,（1986）,『認知科学入門—「知」の構造へのアプローチ—』, 東京, サイエンス社.

渡辺実（1991）,「『わがこと・ひとごと』の観点と文法論」,『国語学』, 165集, 1-14.

Free eBooks by Project Gutenberg, Project Gutenberg Literary Archive Foundation（PGLAF）, 2008-9. Web. 16 September 2008, 30 October 2008, 18 February 2009, 19 August 2009. < http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page >.

拙論（2009a）,「用法間の相違と identify を特徴づけるもの— identify という語の意味（1）—」,『大阪学院大学 国際学論集』, 第20巻１号, pp.147-171.

拙論（2009b）,「Identify の類義語について— Identify という語の意味（2）—」,『大阪学院大学 国際学論集』, 第20巻２号, pp.57-112.

拙論（2010）,「Identify の反意語— Identify という語の意味（3）—」,『大阪学院大学 国際学論集』, 第21巻第１号, pp. 57-96.

使用テクスト

Dickens, Charles（1987）, *A Tale of Two Cities*, Oxford, Oxford University Press.

James, William（1995）, *Pragmatism*, New York, Dover Publications, Inc.

Poe, Edgar Allan（1975）, *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*, New York, Vintage Books, A Division of Random House.

Santayana, George（1998）, *The Life of Reason*, New York, Prometheus Books.

ディケンズ著，本多顕彰（訳）（1977），『二都物語』，東京，筑摩書房．
ジェイムズ，W. 著，桝田啓三郎（訳）（1998），『プラグマティズム』，東京，岩波書店．
ポオ，E・A 著，阿部知二 他（訳）（1999），『ポオ小説全集 1』，東京，東京創元社．
ポオ，E・A 著，田中西二郎 他（訳）（2001），『ポオ小説全集 3』，東京，東京創元社．

辞書

Concise Oxford English Dictionary (COD), Eleventh Edition, Revised, Oxford, Oxford University Press, 2008.

Longman Dictionary of Contemporary English (LDCE), New Edition, Pearson Education Limited, 2007.

Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD), Seventh edition, by Hornby, A.S., Oxford, Oxford University Press.

The Oxford English Dictionary (OED), Second Edition, on CD-ROM, Version 3.1, Oxford, Oxford University Press, 2004.